

事業実績書

事業名	認知症の人が当たり前で暮らせる地域を当事者とともにつくるための住民対話
場所	沼津市 今沢 地内
期間	平成 29 年 7 月 4 日 ~ 平成 30 年 3 月 28 日
日程	実施項目・作業項目
事業内容	<p>○本年度活動についての打ち合わせ 日時：平成 29 年 8 月 27 日 19:00~20:00 場所：中今沢公民館 参加者：中今沢結いの会メンバー、NPO 法人ユートピアメンバー、他協力者 参加人数：10 名 実施内容： NPO 法人メンバーから、本年度の事業についての趣旨と認知症連続講座「認知症の人が当たり前で暮らせる地域をつくるために」の企画内容（予定）についての説明を行い、他のメンバーから意見をいただいた。また、今回は、今沢を拠点としての企画であることから、できるだけ今沢地区全体から多くの参加者を募っていきたいという NPO 法人メンバーの考えに対して、中今沢結いの会のメンバーから、今沢地区連合自治会、今沢地区民生委員会、今沢地区社協主催の寿サロン等で趣旨説明をした上で講座のチラシを配布したり、今沢地区全戸への告知のために回覧板で講座チラシを回したりしたらいいのではないか、と意見が出され、メンバーが協力して広報することになった。</p> <p>○第 1 回認知症講座「認知症の人が当たり前で暮らせる地域とは」 日時：平成 29 年 11 月 26 日（日）13:30~16:00 場所：今沢地区センター3 階会議室 参加者：今沢地区の認知症の方を介護している家族、今沢地区の地域住民、今沢地区の店舗店主、愛鷹地区の地域住民、地域包括支援センター職員、沼津市内の施設や病院の介護職員、看護職職員、ケアマネジャー、訪問介護士、訪問看護師、NPO 法人ユートピアメンバー等 参加人数：56 名（参加予定者：63 名） 参加率：88% 講師：稲垣康次氏（NPO 法人認知症フレンドシップクラブ富士宮事務局、富士宮市役所職員） 実施内容： 本講座には、昨年度の認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」の講師の一人であった富士宮市役所職員である稲垣康次氏を再度お招きし、富士宮市で実践してきた認知症当事者を中心とした街づくりの活動について、より具体的に紹介していただいた。そこで稲垣氏が強調したのは、「認知症の本人がもう一度人生をやり直せると思えること、そして生きる希望を見出すことができること」が一番重要</p>

だということだった。そのために、地域住民は、認知症という病気に詳しくなるのではなく、その人に詳しくなって、認知症の本人と人と人として支え合うパートナーであるという意識を持つことが重要である。また、認知症だからといって何もできないと思いついて何もさせないのではなく、認知症であっても気持ちよく安心して買い物ができたり、散歩ができたり、旅行ができたりと、今まで通り普通に暮らせるような地域を作るためにどんな工夫ができるのかを住民が主体的に考えていくことが大切だと訴えた。

こうした稲垣氏の講話を受けた上で、後半では、6名前後のグループに分かれ、対話式のグループワークを行った。グループワークでは、①グループメンバーが今直面している問題を出し合い、②当事者は何に困っているのか、どうしたいと思っているのかと、その問題について当事者の目線でとらえなおし、③さまざまな立場や経験からみんなで知恵を出し合って本人の希望に沿う方法を考えてみる、という三段階で対話を行ってもらった。その目的は、家族や地域住民として認知症の人と関わり、自分だけで問題を抱えていると、「認知症は大変、おしまい」と絶望的になってしまうことがあるが、本人の立場に立って発想の転換を試みたり、本人が生きやすくなるための工夫や知恵を異なる立場の人たちの対話で考えてみたら、解決の糸口や希望も生まれてくる、という思考過程を体験してみるということであった。

各グループには認知症の人を介護する家族、地域住民、ケアマネ、介護士、看護師、地域の店舗店主等、様々な立場や経験のある参加者を組み合わせた。それにより、活発な意見交換がなされており、例えば、徘徊する近所の認知症男性の存在について、本人は「歩きたい」「外に出たい」と思っているのだから、男同士の会を作ってみんなで歩いてみたらどうか、といったアイデアが出されていた。

グループワークで出された意見については、法人スタッフが書記として付箋に記し、模造紙に貼る形で記録し、最後にグループ発表をして、参加者全員に各グループの議論を共有してもらった。

人員配置：法人スタッフ10名が会場設営、受付、会場誘導、駐車場誘導、グループワーク時の書記等を行った。

○第2回認知症講座「認知症を自分事として考える—VR認知症体験と当事者の声から—」

日時：平成30年1月21日（日）13:30～16:30

場所：プラサヴェルデ407会議室

参加者：今沢地区の地域住民、認知症の方を介護している家族、店舗店主、信用金庫職員、その他沼津市内の地域住民、沼津市行政職員、地域包括支援センター職員、沼津市内の施設や病院の介護職員、看護職員、ケアマネジャー、訪問介護士、訪問看護師、静岡県東部地区の施設の介護職員、診療所の医師、NPO法人ユートピアメンバー等

参加人数：80名（参加予定者：80名）参加率：100%

講師：下河原忠道氏（株式会社シルバーウッド代表取締役）

樋口直美氏（レビー小体病当事者、『私の脳で起こったこと』著者）

実施内容：

本講座では、認知症をまず自分事としてとらえ、そこから認知症になっても今と変わらず当たり前に分らしく暮らせる地域を作っていく在り方を考えていくことを目

的として、前半では、株式会社シルバーウッド代表取締役の下河原忠道氏に「バーチャルリアリティ（VR）による認知症体験」と題して講演と参加者に対してVR認知症体験の実施をしていただき、後半では、レビー小体病当事者の樋口直美氏に「私たち当事者の情報発信で変わった認知症の常識」と題して講演を行っていただいた。

下河原氏は、誰もが最期まで自分らしく暮らせる場としてサービス付き高齢者住宅「銀木犀」の経営もされており、そうした現場での認知症の方をめぐる様々な関わりや課題からVRによる認知症体験のプログラムを企画したという。また、現在国中心に推し進められている「認知症予防」についても、認知症になっていない人たちの価値観に基づく理論の押し付けであり、認知症当事者の人たちの思いへの想像力が欠落していると指摘する。当事者の思いへ想像力を逞しくし、当事者の意見に耳を傾けていくためにも、実際に認知症の人たちの世界を体験してみることによって立場と視点を転換していくことが重要だと訴えた。

その上で、6名前後のグループに分かれ、VR機器を使い、参加者全員が認知症の人の世界を体験した。体験内容は3つで、一つは、アルツハイマー型認知症の方が車から降りる際に感じているという、ビルから飛び降りるような感覚の恐怖体験、二つ目は、アルツハイマー型認知症の方が乗車した電車の中で記憶を失い、どこで降りたらいいのか、どうしたらいいのかわからなくなり不安にさいなまれるという体験、もう一つは、レビー小体型認知症の方の見える幻視体験であった。各体験プログラムは、実際に認知症当事者に体験を聞いたり、実体験からシナリオや監修に関わってもらったりして作ったということもあって、認知症の人の世界について参加者は非常にリアルなVR体験ができたようであった。また、各プログラムの体験後にグループ内で感想を出し合い、今後のケアに生かしていくにはどうしたらいいのかを話し合った。

後半では、レビー小体病当事者として、レビー小体病の症状や認知症であることによって社会から差別された体験などについて、講演や執筆で活発に情報発信されている樋口直美氏に1時間講演をしていただいた。樋口氏には昨年度の認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」でも講演をしていただいたが、今回は更に具体的にレビー小体病の症状について説明された上で、自身の実体験から、認知症と診断された後の絶望から、同じ認知症の仲間たちとの出会いや、自身によって自分の症状を掘り下げて考えて言葉に表現していく「当事者研究」によって、認知症になってからの人生に意味を再発見し、社会へのリカバリーができたプロセスについて語られた。講演後参加者と樋口氏との対話も積極的に行われ、様々な人とのつながりや言葉を持つことで、認知症になっても人生をリカバリーできるという樋口氏の主張に大きな共感が生まれ、参加者も希望を持てたようだった。

人員配置：法人スタッフ9名が会場設営、受付、会場誘導、駐車場誘導等を行った。

○第3回認知症講座「認知症の本人と家族と地域住民とがパートナーとして共に幸せに暮らしていくために必要なこと」

日時：平成30年2月25日（日）13:30～16:00

場所：今沢地区センター3階会議室

参加者：認知症当事者、家族、今沢地区の地域住民、今沢地区の美容室店主、愛鷹地区の地域住民、沼津市行政職員、地域包括支援センター職員、沼津市内の施設や病院の介護職員、看護職員、ケアマネジャー、訪問介護士、訪問看護師、NPO法人ユートピアメ

ンパー等

参加人数：73名（参加予定者：75名） 参加率：97%

講師：丹野智文氏（若年性アルツハイマー型認知症当事者、「おれんじドア」代表）

実施内容：

本講座は認知症連続講座の最終回として、では、認知症当事者と、家族、地域住民とが、誰かが一方的に我慢するのではなく、共に支え合いながらみんなが幸せに暮らしていくためには、どうしたらいいのかということを考えていくことを目的として開催した。その講師として、若年性アルツハイマー型認知症当事者であり、地元仙台で当事者が当事者の相談を受ける窓口「おれんじドア」を主催されている丹野智文氏をお招きして講演をしていただいた。

丹野氏は、39歳という若さでアルツハイマー型認知症と診断された時に絶望して、家に閉じこもり泣き暮らしていたという。だが、そうした絶望には、社会での認知症への偏見とともに、自分自身の中にある「認知症になったらおしまい」「何もわからなくなり、家族にも暴力を振るうようになって、すぐに死ぬ」という認知症についての誤った理解と強い偏見があったことが大きかったと分析する。

また、丹野氏は、「認知症の人からできることを奪わないでください」と声を大にして訴えた。認知症だから何もできないとか、失敗したら大変だと思って、介護する側は何でもやっつけてあげようとするが、それが認知症の人から希望を奪っている。むしろ、失敗しても怒られなかったり、できるまで待つてくれるような環境があるだけで、認知症の本人は安心して過ごせるし、今までできないと思っていたこともできるようになる、と。そして、それは家族など周りから支える人たちの気持ちも楽にするし、実際にそれで大変だった介護も楽になったりする、という。

丹野氏は、そうした自身の具体的な経験に基づいた思いにより、3年前に、認知症当事者による認知症当事者のための相談窓口「おれんじドア」を開いた。「病名を聞かない。困っていることを聞かない。アンケートを取らない。これからやりたいことを聞いて、それが実現できる方法を一緒に考える」という丹野さんによる徹底した当事者への寄り添い方により、窓口を訪れた認知症当事者たちはみな笑顔になり、また社会とのつながりを取り戻していくという。

丹野氏は、最後に、「認知症になったらおしまいなのではなく、人生は認知症になってからも新しく作ることができる」と強調した。

丹野氏による希望のある講話の後、後半では、6人前後のグループに分かれ、対話式のグループワークを行った。認知症になったことで、誰かが我慢したり、傷ついたり、あるいは傷つけあったりすることなく、本人も家族も専門職も地域住民もみんなが共に支え合いながら幸せに暮らせるようになるための工夫や方法を考えるきっかけをもつことをグループワークの目標とした。

具体的には、『旅のことば—認知症とともによりよく生きるためのヒント』（丸善出版）をテキストに使った。『旅のことば』では、認知症を「新しい旅」の始まりとして前向きにとらえ、本人や家族やまわりで支えている人たちが実践している「新しい旅」をよりよく生きるための工夫が40の「ことば」（「本人のことば」「家族のことば」「みんなのことば」として紹介されている。グループワークでは、そのなかから「おもしろ化」「自分の仕事から」という2つの「ことば」を取り上げて、そこで提示されている工夫を手がかりに、グループのメンバーが実際に実践してきた工夫を紹介したり、

	<p>自分だったらそれについてどんな工夫ができるのかを語り合った。</p> <p>認知症本人の何気ない言動を盛り上げて返してみることで、日々たくさんの笑顔が生まれ、明るく楽しい空気に包まれる効果があるという「おもしろ化」については、丹野さんから、「自分がコーヒーを淹れたことを忘れて、妻に『ありがとう』と言ったら、妻が『どういたしまして。でも私が淹れたわけじゃないけどね』とさらっと返してきた」というエピソードが披露された他、各グループでは、面白いと思った言葉をメモにして、後で読んで思いだし笑いをすると気分が明るくなる、といった家族の経験や、昔の思い出話をたくさんすることで話を盛り上げる、といった介護職の方の工夫等が出されていた。その一方で、家族関係の中では、気持ちに余裕がないと「おもしろ化」は難しいといった意見も出されていた。</p> <p>自分たちの仕事や立場から、認知症の本人がよりよく生きられる社会を作るためにどんな工夫ができるのかを考え、実践することで、みんなにとって生きやすい社会になるし、会社等では顧客サービスの向上につながり、組織としての競争力を高める効果もあるという「自分の仕事から」については、スーパーのレジや駅の改札、役所の窓口などで、「失敗してもいいですよレーン」(スローレーン)があれば、認知症の人だけでなく、高齢者や障害者も助かる、といった意見や、ミシュランのように認知症の当事者が地域の店を評価したらいいのではないかと、といった興味深い意見も出されていた。</p> <p>グループワークでの議論については専用のメモ用紙に記録し、最後に、各グループで出された工夫や意見について発表してもらい、参加者全員で共有した。</p> <p>人員配置：法人スタッフ9名が会場設営、受付、会場誘導、駐車場誘導、グループワーク時の書記等を行った。</p>
事業効果	<p>昨年度は、認知症をケアの側からだけでなく、当事者の声を聞くことで認知症について理解していくという事を目的にして、認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」を開催し、沼津市民を中心として、170名の方に参加していただいた。このフォーラムでは、レビー小体型認知症当事者の樋口直美さんにもお話しをしていただき、当事者の声を講演という形で初めて聞いた参加者にとっては、大きな衝撃と発見と希望がもてるフォーラムになったと言える。だが、昨年度のフォーラムは、多くの市民の認知症についての理解を深めるという点で啓蒙的な効果はあったと言えるが、一方では、参加者が、認知症を自分事としてとらえ、自分の住む地域を認知症になっても安心して暮らせる地域にするための具体的な活動へとつなげていけたかどうかは、心許ないという思いが主催者側には残った。</p> <p>そこで、本年度は、NPO法人事務所のある今沢地区で、誰が認知症になっても、今までと同じように自分らしく当たり前で暮らせる地域になっていくためにはどうしたらいいか、ということをもみんなで具体的に考えていくための対話の場を作り、今後の住民主体の活動につなげていくことを目的として、「認知症の人が当たり前で暮らせる地域を作るために」というテーマで、3回の認知症連続講座を開催したわけである。</p> <p>○第1回認知症講座「認知症の人が当たり前で暮らせる地域とは」について</p> <p>当初、今沢地区での初めてのNPO法人ユートピア主催の講座の開催であることから、なかなか今沢地区の住民からの参加を募ることに苦戦したが、自治会、民生委員会、地区社協等にNPO法人メンバーが参加させていただき趣旨説明をした上で、協力をお願いしたこと、そして、中今沢結いの会のメンバーがそれぞれ地域住民に働きかけをし</p>

てくれたことで、結果的には参加者の8割以上を今沢地区からの参加者が占めることとなった。また、参加者の立場や関心も多様で、地域住民では、認知症の方を介護する家族、老人会メンバー、自治会メンバー、民生委員、地区内の店舗店主等が参加した他、専門職も、地域包括支援センター職員、ケアマネジャー、介護職、看護職等の多職種の方が参加してくれたことで、認知症の人が当たり前で暮らせる地域を、それぞれの経験を活かし、みんなで考えていくための対話の場の下地ができたと言える。

前半の稲垣康次氏による講話については、住民が主体的になって、認知症になっても今までと変わらず自分らしく暮らせる地域にするための工夫を考えたり、実践している富士宮の活動の在り方や、そうした活動が成果を上げて、実際に富士宮市民に聞いてみると、9割近い人が「認知症になっても別によい」と考えているという報告は、参加者をとても刺激し、沼津市もそんな地域になってほしいという思いを強くさせたようだった。

後半の対話式のグループワークでは、稲垣氏の話を受けた上で、それぞれが抱えている問題を、当事者の目線でとらえ直し発想の転換を試みることで、そして様々な立場や経験からみんなで知恵を出し合って解決の糸口を探っていくことを試みた。が、事業内容に記したような、徘徊する近所の認知症男性の立場に立って、男同士の会を作ってみるなど歩いてみたらどうか、といったアイデアが出たグループもあった一方で、メンバー一人一人が自身が抱えている問題を次々と吐露するだけに時間を費やして、本人の立場からとらえなおすことがなかなかできなかったグループも多かった。本講座のグループワークでは、年配者の多い地域住民にとって、認知症を本人の立場になって考えるということは簡単ではないということも明らかになった。

ただ、参加者のアンケートには、「自分だけで抱えていた悩みをみなさんに聞いてもらってよかった」とか、「他の方々の体験や考えを聞いて、自分だけではないと思え安心できた」といった感想も多く、認知症の本人と日々向き合っている家族や住民同士が対話をしたり、励まし合ったり、情報を共有したりする場が今までほとんどなく、そうした対話の場を地域に作っていくことも今後必要であることも改めてわかった。

○第2回認知症講座「認知症を自分事として考える—VR 認知症体験と当事者の声から—」について

下河原忠道氏の手掛けるVR 認知症体験は、昨年末の時点で既に1万1千人以上の方が体験している。医療・介護関係ばかりでなく、厚労省や内閣府等の行政機関や自治体からも依頼が多数寄せられて実施しているという。そして、昨年、アジア太平洋高齢者ケア・イノベーションアワード「テクノロジー部門」最優秀賞を受賞している。当事者の声にいかに関心を傾けるか、ということが認知症ケアや認知症の人が住みやすい地域を作っていくために重要であることが再認識されている昨今において、認知症を当事者目線で理解しようとするこのVR 認知症体験プロジェクトの意義は大きいと言える。

本年度の認知症連続講座でも、認知症を自分事として考える、ということの一つの大きなテーマとしているため、第2回目の本講座でのVR 認知症体験により、参加者の認知症に対する意識の変化が期待された。

実際、VR 認知症体験の前後に行ったアンケートでは、大きな変化が現れている。例えば、「認知症のある方が怖い」に対する回答で、「はい」と答えた方が8%から2%に減り、「いいえ」が42%から51%に増えている。また、「認知症は、自分が何をしたい

のか全くわからなくなってしまう病気だ」に対する回答で、「はい」は 8%から 3%に減り、「いいえ」は 39%から 52%に増えている。他、「認知症のある方が困っていたら、積極的に声をかけたり助けたりしようと思う」に対する回答は、「はい」が 35%から 47%に増え、「いいえ」が 24%から 10%に減っている。

認知症の本人が、実際にどういう世界でものを見ていて、何に困っているのかを、VRという形で追体験してみることで、参加者は、認知症の世界について単なる知識としてではなく、自分の身体感覚を通して生々しく理解することができたのではないだろうか。今回の体験によって、地域住民が、認知症を自分事として考えるための手がかりとなり、認知症の人も自分らしく暮らせる地域づくりへとつながってほしいと思う。

また、後半では、レビー小体病当事者の樋口直美氏が講演を行った。認知症当事者と対等にかかわることの大切さや、当事者とともに周りでサポートする人も一緒に認知症についての当事者研究をすることで、認知症についてのイメージをプラスに変えたり、それによって認知症の本人が生きる希望を見いだせていったりという、自身の経験に基づいた樋口氏の力強いメッセージは、多くの参加者の心に響いたようである。

アンケートには、「常に当事者意識を持っていきたい」「生きる希望につなげるためのヒントを得られた」「認知症になっても希望がもてることを図式的に説明してもらって、考えていく筋道がわかった」といった前向きな意見が多く寄せられた。

VR 認知症体験によって認知症の人の世界を身体感覚を通して理解すること、そして、その上で、認知症当事者の経験やメッセージを聞くことで、認知症を他人事ではなく自分事として考える意識と、そして、認知症になっても自分らしく生きられるという希望を、多くの参加者が持つことができたのではないだろうか。

○第3回認知症講座「認知症の本人と家族と地域住民とがパートナーとして共に幸せに暮らしていくために必要なこと」について

当事者の目線から認知症について考えることをひとつの大きな柱としてきた本年度の認知症連続講座の最終回のテーマを、「認知症の本人と家族と地域住民とがパートナーとして共に暮らしていくために必要なこと」としたのは理由がある。それは、昨年度の認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」についての参加者の意見の中に、「本人の声に耳を傾けることが大切であることはわかったが、本人の声を大切にすることというのは、介護に大変は思いをしている家族や、苦勞している地域の人たちは、本人の主張や思いを一方向的に受け入れ、ひたすら我慢し堪えるしかないのか」という意見が少なくなかったからである。

当事者の声を聞くことと、周りで支える人たちも幸せになる、ということは矛盾しないということ、つまり、誰かが一方向的に我慢するのではなく、本人も家族も地域の人たちもそして専門職も、みんなが共に幸せに暮らせる在り方もあるんじゃないか、そんな希望を連続講座の最後に見いだせたら、という思いで第3回講座を開催したのである。

実際に、自らも認知症当事者として家族や仲間たち、職場の同僚たちとした対等な立場で対話をし、一緒に工夫したり、互いに支え合ったりしている丹野智文氏の具体的な経験に基づく話は、みんなが共に幸せなる方法を考えることを目的とした本講座において、大きな意義があったと言える。丹野氏は、認知症であることを仲間や職場、

地域住民に公表することについて、家族が辛い思いをするのではないかと葛藤があったと言うが、結局公表したことで、周りからの理解や協力が得られて、自分自身もそして家族もかえって楽になったという。そして、今は、丹野氏自身が認知症当事者として認知症の本人の相談に乗ることで、認知症の本人がまた生きる希望を取り戻すきっかけを作っている。

認知症という病を閉ざされた家族の中だけで抱え込むことによって、本人と家族の関係はより硬直化してしまい、家族は苛立ちや疲弊感を募らせ、本人はそうした家族を前により深い絶望の淵に立たされる。丹野氏の言うように、認知症の本人にも家族にもある認知症への偏見からまずは解き放たれ、認知症であることをみんなで共有し、様々なつながりに開いていくことが、本人も、家族も、そして地域住民や専門職も、みんなが心地よく幸せに生きていくための第一歩であり、そのためにも本人や家族が躊躇なく認知症であることを公表できる環境であることが大切となってくると言えるだろう。

後半の対話式のグループワークでは、事業内容にも記したように、『旅のことば』の中の「おもしろ化」と「自分の仕事から」という「ことば」を手がかりに、みんなが幸せに暮らせるための工夫を出し合った。

第1回目の講座のグループワークでは、対話式のグループワークへ初めて参加した参加者も多く、そのため対話の進行が難しかったり、自分の抱える問題を話すだけで終わってしまったりするグループもあったが、今回の講座のグループワークでは、連続して講座に参加している参加者も多かったため、対話もスムーズに進み、事業内容に示したような意見やアイデアが提示されるなど、各グループで活発な意見交換がなされていた。アンケートでも、「マイナス思考になりがちな場面でのスイッチの切り替えのヒントになった」とか、「おもしろ化、ユーモアを交えた会話をするというのは、家族に心の余裕がないとなかなかできないが、これからもこうした機会に参加して、自分の心を広くしていったり、他の経験者や違う立場の人と話をしていきたい」という前向きな意見が多く寄せられた。

○3回の連続講座を通して

本年度の認知症連続講座は、今沢地区を拠点として行ったこともあって、毎回参加者の半数以上が今沢地区住民であり、また2回もしくは3回とも連続して参加してくれた方が多かった。そうした積み重ねによってより理解が深まったことが、各講座でとったアンケートで明らかになっている。特にアンケートの最後に設けた「認知症の人が当たり前で暮らせる社会とは、どんな地域だと思いますか」という質問に対する回答にはその変化が顕著に表れている。

第1回目講座では、この質問に対して、「本人、家族、医療、地域がチームとして連携すること」「つながりある社会」「認知症の理解を深める」といった、いわゆる教科書的で漠然とした回答が多かった。それに対し、第2回目講座では、「特別な人という扱いではなくその人の個性として受け止められること」「地域の人全員が当事者意識を持った地域」「対等な関係を築くこと」「認知症は作られたものだという事を地域の人たちが理解し、リカバリーできるという思いで、認知症と上手に付き合いながら暮らしていける社会」「地域住民一人一人が自分も認知症と背中合わせの所にいることを認識し、「自分事」として考え、対応できる社会にできるとよい」「今まで生活のなかでして

	<p>きたことができる限り支障なくでき、それが困難になってきた時も本人の思いを聞き、本人の希望がまわりの方々と共につながっていける社会」「子供たちの世代から認知症の方が地域で暮らすのが当たり前である社会にしたい」といった、認知症当事者の立場に立った具体的なイメージや提案が出されたアンケートが多かった。</p> <p>更に、第3回目では、「認知症とか障害者という区別を行うことなく、支援を必要とする人に対する支援を当たり前に行うことができる社会を作る」「特別な人というのではなく、パートナーとして暮らしていきたい」「住民がしっかり認知症を理解している事。私のまわりにいる人や同級生でさえ認知症がよくわからずに偏った考えを持っているので、もっともっと関心をもってほしい」「認知症の人が気兼ねせずに買い物に行ける町。認知症にやさしい町ステッカーを作る」「本人が認知症である事を、地域の人にオープンにできる環境であることが大事」「認知症に限らず、老人や生活弱者全般にやさし施設、商店等々になれば解決!」といった、第2回目にまして、より具体的で今後の実践につながっていきそうな提案も多く出されていた。</p> <p>このように三回の連続講座を重ねることで、参加者の多くは、「認知症になったらおしまい」「認知症になったら何もできなくなる」といった認知症に対する偏見を払拭し、自分事として考え、そして当事者と対等につきあい、共に地域を考えていく、そうした意識を持つに至ったのではないだろうか。そして、今沢地区住民の中でも、今後この地区で認知症の人が当たり前で暮らせる地域を具体的に作っていくための、共通認識を持つことができたと言えるだろう。</p> <p>また、連続講座の最終回に、今沢地区から1名、沼津市内の他の地区から1名、計2名の認知症当事者も参加してくれた。そして、それぞれのグループで、当事者としての発言をしてきていた。当事者がこのような公的な場に参加し、発言できる雰囲気を作れたことは、今回の事業におけるひとつの大きな成果だと言えるだろう。</p>
<p>今後の活動予定</p>	<p>今年度の認知症連続講座で作られてきた地域住民の認知症に対する認識や自分事として考える思考方法等を大切にしながら、来年度以降は、今沢地区で実際に認知症の人や家族、そして地域住民が共に集い、みんなが地域づくりをしていくための拠点としての居場所を地域住民と一緒に作っていきたいと考えている。そのプロセスの中で、地域住民主体の勉強会によって、認知症や介護についての理解がより深まっていくようにサポートしていきたい。</p>
<p>自己評価</p>	<p>事業計画に示した勉強会と住民対話については、三回の認知症連続講座と対話式のグループワークという形で実施でき、また、講座を重ねるごとに、参加者の認知症に対する理解は明らかに変化し、自分事としてとらえ深まっていったと言える。また、今沢地区で認知症にやさしい地域を作っていくための共通認識を地域住民と持つことができ、今後の活動の下地ができたと言えるだろう。その点で、本年度の事業は概ね評価できる成果をあげられたのではないかと考えている。</p> <p>だが、収支の面では、VR 認知症体験に多額の費用がかかったこと、各講座の人員費が予想以上にかかったこと等により、結果的には大幅の赤字となり、事業の継続性という意味では課題が残った。</p>